

福井文雅・山田利明・前田繁樹編集

【講座 道教】第四卷『道教と中國思想』

龜田勝見

『講座道教』の第四卷たる本書は、前三卷までが道教そのものを對象とした様々な角度からの研究成果を扱ってきたのを承けて、道教を取り巻く諸思想・文化と道教との關係性に注目した考察を扱う。道教は、中國各地域各時代に存在した様々な思想や文化と幅廣く交流し、それらを自らに取り込んでいく生命力旺盛な宗教である。それ故、道教の周邊部は曖昧模糊としており、「道教」と非「道教」の境界線をどこに引いたらよいのか、確定が困難な狀況が存在する。にも関わらず、中國思想・文化全體と道教との關係を包括的に捉え把握していく作業は、第一卷冒頭におけ

る野口鐵郎氏の刊行説明中の言葉を借りるならば、「總體としての道教」を把握するために有効かつ必須の研究方法として繼續されるべきである。

本書の内容は四部に分かれている。第一部では福井文雅、前田繁樹、馬淵昌也、森由利亞の四氏が「中國の思想と道教」をテーマに論じ、第二部では菊地章太、山田利明、岩崎日出男の三氏が「中國人の宗教意識と道教」を、第三部では二階堂善弘、土屋昌明、遊佐昇の三氏が「文學と道教」を、そして第四部では有澤晶子、奈良行博、杉原たく哉、大野修作の四氏が「藝術と道教」をそれぞれ論じ

る野口鐵郎氏の刊行説明中の言葉を借りるならば、「總體としての道教」を把握するために有効かつ必須の研究方法として繼續されるべきである。

ている。以下、各論ごとに紹介と論評を行っていく。

I 中國の思想と道教

福井文雅「道教の成立」

「道家」と「道教」という言葉の間には、そもそも意味上の區別があつて用いられてきたわけではないのに、日本の研究者の間では「道家」を哲學、「道教」をいわゆる宗教に區別して用いている。本論は様々な根據を提示してその誤りを強く主張する。筆者が從來より多くの場で主張してきた説の要約かつ繰り返しである面が強く、日本の研究者間における「誤解」の始まりを提示する點にやや新味があるうか。言葉の吟味が重要であることはその通りであり、「道家」と「道教」が便宜的な分類に過ぎない點を抑えておくことは確かに必要だろう。それ故本書の開卷第一の論文として本論が配置されているものと考ええる。ただ、用語の問題も重要な一方、やはり從來から議論となつてゐる、所謂先秦道家思想と道教との思想的連關性を論じることとも一層重要であり、そちらにも言及がほしかった。ま

た、以降の各論文においても何らかの形で「道教」「道家」に對する共通理解が基盤にあつて然るべきであらうが、その様子は無い。「講座道教」全體では無理としても、第四卷内だけでも「道家」と「道教」という言葉の使用法について、一定の基準が設けられていればよかつたのだが。

前田繁樹「佛道論争に於ける諸問題」

いわゆる佛道論争について、從來言われているような激しい對立や歴史的意義ないしは後世への影響力が果たしてあるのか、という疑義を呈示するのが本論の主題である。佛道論争は中國宗教史上では例外的な事件であり、双方にとって結果的に現實的な利益を得ていない、と結論づけられる。評者もかねてより、佛教側はともかく、道教側は對立よりも融和の姿勢の方が強かつたであらうと考えており、緻密な實證をも踏まえた筆者の主張には説得力を感じる。ただ、融和の姿勢が強かつたとしても、佛道双方とも、相手との違いを認識し自らの優越性を見出そうとする心情は一部に強く存在したであらう。その顯在化したもの

が佛道論争である。個人でも學問や宗教でも言えることだが、外部からの無視できぬストレスを感じること、その解消のために通常では發揮し得ないエネルギーを發して活動し、その結果自らの飛躍的進歩が得られることがある。

その活動は、各人各派の状況に應じて様々なバリエーションを伴う。佛道論争も、排斥や先後關係の指定、あるいは表立った對立をせずに裏で教理を吸収していく活動などと同様、その意味では意義を認めるべきではないだろうか。

馬淵昌也「儒教と道教の關係について—元・明期理學

者の内丹觀を中心に—」

元・明時期の理學者が、道教、中でも内丹思想をどのようにに理解し評價していたか、という點に焦點を絞り、儒教と道教の關係を考察する。宋學以來の理學における修養理論と道教の内丹との間には、現實の人間構造を理解する仕方や理想へと至るプロセスに關して近似した論理構造が見られるが、内丹の経験者でもあった當時の理學者が内丹に下す評價は多種多様である。筆者によれば、彼らの評價が

分かれるのは、内丹實踐理論の持つ、理學との異同の二つの焦點、すなわち虚無の道への超脱、氣を對象とした實踐の評價をめぐるものだと言える。近世士大夫と道教との關わりという點に關して幅廣く例を擧げていき、その傾向を捉える本論は、近世の儒教と道教との關係に對する理解に資する面が大きい、筆者も述べているように、儒教と道教の關係というあまりにも廣い領域の一部分に限定して語っているに過ぎない。近世士大夫の内丹に對する視點が、道教・儒教の展開と如何なる關係にあるかを今後示して頂ければと思う。

森由利亞「近世内丹道の三教一致論—牧常晃と李道純の三教一致論と性命双修説を中心に—」

儒佛道三教一致の風潮が隆盛を極めた明末に比して、宋元代における三教一致論は未だ摸索段階にあり、最も活性化していた内丹道におけるそれについて、その實態を牧常晃と李道純の對比によって探ろうとする。佛道が相互に補充し合う性命双修論の三教一致論から、三教それぞれが獨

立して共通の境地に到達できると考えるそれへと展開していく歴史的過程を捉える點には深く領きたい。ただ、明末の段階でも性命双修論が少なからず残っているのであれば、その流れは單純ではない。その點について一層深く掘り下げた研究が今後展開されることを願う。

II 中國人の宗教意識と道教

菊地章太「道教の終末思想」

冒頭において、「終末論」すなわち eschatology が、終末へ直線的に進む世界觀であるのに對し、道教に見える終末思想が天地が崩壊と再生を繰り返す循環型であることを確認する。その上で、漢代讖緯文獻や漢譯阿含經典、漢譯密教經典などが道教終末思想の形成に及ぼした影響を論じ、そこに理想の過去への回歸という願望が本質的要素として存在することを指摘する。中國古代思想にしばしば見られる尙古の思想と六朝道教における終末思想との關連を指摘する點は首肯しやすい。ただ問題は、後の岩崎論文との間で「密教」の定義が異なることである。無理な話かも

知れぬが、兩方とも道教に對して密教がどのように影響しているかを考察する論文である以上、何らかの連絡があつてもよかつたように思う。

山田利明「死の思想と道教」

不老不死を目指す道教では死や死後の世界をどのように説いているかを明らかにする。まず、道教では惡行によつて壽命が削られるという道德觀のもと、死は惡行の結果として、あるいは得仙の失敗として理解されていたが、一方で、道教では死後の世界からの救済という問題も扱い、精神を不滅のものと位置づけることで、死後の功德による得仙が説かれるようになり、それに伴つて死後の世界觀も變化していったという。古代より生を喜び死を厭う氣持が強く表現された不老不死信仰は、本來死というものに絶對的な負の價値を與える。しかし、不老不死が實現できなかった時に陥る場所を救いのない世界と見ると、自分の死後への不安と恐怖や、親族知人の死を受け容れることの困難さが生じる。それ故徐々に死の意味を變化させていかざるを

得なかったのであろう。その意味で、筆者の意見は妥當である。ただ、六朝時代の道教における様々な思想的變化發展には佛教の影響も強い。特に死の位置づけの變化に關しては、輪廻轉生説の流布も大きな要因ではないかと考える。その點も論じてもらえるとよいのだが。

岩崎日出男「道教と密教」

從來より注目されながらも研究成果のいまだ少ない道教と密教の關係を論じる。まずは中國密教の定義を、歴史的には金剛智の來唐以後、内容的には灌頂儀禮を中心とした所謂純密と規定し、そのような密教と道教との交渉を文獻上で探ってみると、該當する記事は一例のみであり、兩教間の交渉は從來考えられている程盛んではないことを述べる。また、密教の呪、道教の符というものが、互いの呪術力を象徵するものであるとも指摘する。兩教の交渉が意外と少ないという點には新しい知見を得られた。ただ筆者自身も述べるように、道教と密教との交渉には、他にも検討すべき課題が残っており、特に思想方面での交流を視野に

入れて論じて欲しかった。包括的かつ総合的な今後の研究成果を期待するところである。なお、本論は第一部で扱われるべきだと思いが、なぜ第二部の末尾にあるのであろうか。

III 文學と道教

二階堂善弘「通俗文學と道教」

宋代以降に發達した通俗文學について、元・明代の戯曲や通俗小説に行を絞る、そこに見える道教と關連のある作品を取り上げる。この頃の文學作品には、特定の宗教の影響だけを取り出すのが困難であるという共通の傾向があり、それは民衆の世界觀において、儒佛道三教と民間信仰が渾然となつて尊ばれていたことを示す、と考える。民衆の意識において、道教が獨立して強い影響力を持っていなかったというのは、その通りであろう。道教の研究において、道教の境界線を定めようとする作業は、その本質をよくよく考えないと、作業の意義そのものが消失してしまう可能性を示唆する論文である。多くの通俗小説が民間文化

に對し、經典や正史以上の影響力を行使するほどだった、とあるのはその通りなのであろうが、できればそれを證明する記事が何かを提示してくれればよかった。

土屋昌明「仙傳文學と道教」

仙傳の主たる興味が神仙への現實的手段と目的としての神仙世界の描寫にあつたとし、史傳と神仙幻想、および兩者の接合という三點において、仙傳をすぐれて中國的な文學と評價する。また、仙傳が志怪小説と異なり、より密接に道教思想と関わっていることを指摘する。その上で、六朝時代を中心とした個々の仙傳の性格を論じる。筆者の一連の研究を併せると、仙傳全體の概觀を理解する上では大いに助けとなる論考である。特に『神仙傳』と内傳類との關係を、その内容の出入について詳細に考察し、内容の時代確定作業を試みる部分は説得力を持つ。ただ、現本『神仙傳』の内容が、葛洪の著した内容らしく見せるために内傳類を要約したものである可能性も捨て切れず、評者は筆者が斷定するほどに内容の先後を明確にはできないと思う。

遊佐昇「詩と道教」

道教と關係する詩の中でも、六朝期に文人達の間で盛んに作られた「步虛詞」と「遊仙詩」に焦點を絞り、その性格を論じる。「步虛詞」が、付帶する詠唱法に基づいて詠まれて初めてその眞價を見出すことができるという指摘はその通りであつて、道教韻文を扱う際に忘れてはならない點である。また、道教や道士への憧憬が社會に廣く存在するがために、文人が步虛詞などを創作した、と見る筆者の意見も正しいと思う。遊仙詩に「坎壈の詠懷」を述べるものと「列仙の趣き」を述べようとするものの二種類あることが指摘されているが、評者はこれを、文人達の現實逃避の心が陰陽の二様に發現した結果ではないかと推測するが、如何であらうか。

IV 藝術と道教

有澤晶子「演劇・音楽と道教」

本論では演劇と道教の關わりについて、演劇の各要素に現れる道教思想を詳述し、また、音楽に對する道教の態度

や道教音樂の表現法、およびそこで利用される樂器などについて論じている。しかし、冒頭に提示される問題提起は「演劇や音樂をとおして、人々がどのように道教をとらえていったのか」である。これに對する答が明確ではないように思う。また、些末な事で申し譯ないが、愚鼓なる樂器の名稱について解釋する際、本論では「鼓」を「瞽」と解説する呂洞賓の歌唱から「愚昧なものを目ざます警世の鼓」という意味だと結論づけている。これにはやや無理があるのではなからうか。

奈良行博「建築と道教」

序にて提示される本論の目的は「立地や祀廟構成の特質」と「それぞれの道觀の建立にあたって影響していた思想」を探ることにある。前者については、立地條件の違いなどによる特色を踏まえた考察を詳細に記している。後者については、中國固有の宗教特有の現象として山中・山頂に宗教建築を建てることを挙げ、そこに洞天福地の思想が色濃く反映していると説く。いずれも大いに参考となる考

察である。立地條件に關連して吉祥地の選定を第一に考えることを述べているが、それと風水との關係はどうなのであらうか。一言觸れて欲しかったところである。

杉原たく哉「繪畫と道教」

道教と繪畫との關わりについて、道教美術とその周邊、及び山水畫における道教との關係という二方面からの考察がなされる。前者では道教成立から元明代まで、時代ごとの特色を追い、さらには日本美術にまでその對象が及ぶ。後者では、山水畫と道教との、さらには風水との密接な關わりを指摘した上で、道教と深く關わる文人達が多く山水畫を残している實態を述べる。山水畫を描く動機や目的が、道教的な意識に基づくものであることは本論から十分に見て取ることができる。ただ、この分野に對する研究はいまだ十分ではなく、今後の研究の進展への期待を筆者自身も述べており、本論もいわば一種の問題提起で終わっている感がある。「氣」と「風水」以外に、繪畫に影響する道教思想が存在する餘地もあらう。評者も門外漢ながら今

後を期待する。

大野修作「書と道教」

書と道教との關わりについて、漢字が本來的に持つ思想的背景、書寫の材料として用いられてきたのが筆と墨であること、そして鑑賞のされ方の三點に注目し、書は本來道家との繋がりが深かったが、顏眞卿が儒家的忠義者として見なされるとともに、道家的色彩が薄れたと論じる。從來とは異なる視點から論じようとする試みは評價すべきである。しかし、漢字に對する古代中國人の特別な思いや、『老子』の「玄」と墨の色彩との感覺的な連關については、從來の福永光司氏の考察などを踏まえると、もう一步踏み込んだ考察が欲しかった。本論は筆者自身も試論と位置づけており、最終的な結論に達していない感がある。今後の研究に期待したい。

ここに集まった諸論文の間には大きな性格の開きがあるように思う。これまでの研究成果のまとめや、概説的な説

明を主眼とした論文がある一方で、意識的にそれを避けて各分野における課題を狭い領域で論じ、新たな知見として世に問う論文もある。また試論と斷り書きした論文も少なくない。本來ならば一定の結論を確立する段階まで待つて發表されるべき研究であらうに、その點が残念である。また、本書の「道教と中國思想」という題名で論じられるべき分野は極めて多岐にわたり、本書で扱われた分野のみでは概觀するに十分とは言えない。佛教との關係では、密教以外にも禪や淨土信仰などの分野との關連も一層追及されて然るべきであらう。中國文化全般にまで範圍を廣げることが許容されるのであれば、道教と關わる文化には美術關係では工藝もあり、他には武術・占いなども含まれてくる。概説書ではない分、分野が偏つて當然なのだろうが、一層幅廣い道教の周邊部分に關する研究を見てみたかった。

今回本書の書評を書かせて頂いたが、評者の研究範圍を鑑みるに、様々な分野にわたる諸論文を評するのは、まことに力量不足の感を否めない。第四部に相當する分野に對

する素養は特に不足している。紙数の限られた中、周到な言葉で説明することもままならず、また無知故の的外れな書評である場合もあるかも知れぬ。その際はひとえにご寛恕願いたい。

(A5版・二九四頁・二〇〇〇年八月・雄山閣出版刊)